

原著 (Article)

# DSM-5による反社会性パーソナリティ障害・素行障害とサイコパス

Antisocial Personality Disorder, Conduct Disorder  
in DSM-5, and Psychopath

宮川 充司\*  
MIYAKAWA, Juji\*

## 要 旨

2013年アメリカ精神医学会が改訂した診断基準, DSM-5による反社会性パーソナリティ障害と素行障害との連続性と鑑別, サイコパスとの概念的対応について検討した。  
キーワード: アメリカ精神医学会, DSM-5, パーソナリティ障害群, 反社会性パーソナリティ障害, 素行障害, サイコパス

**Key words:** American Psychiatric Association, DSM-5, personality disorders, antisocial personality disorder, conduct disorder, psychopath

## 週刊誌のスクープ記事から

週刊文春2014年2月13日号は、冒頭の「全聾の作曲家はペテン師だった! ゴーストライター懺悔実名告白」と題するスクープ記事から始まった。この記事は、週刊誌には珍しい署名記事で、記事の取材執筆者は神山典士+本紙取材班と記載されていた。この記事の執筆者は、「みっくん、光のヴァイオリン」(神山, 2013)で知られるノンフィクション作家で、同誌3月27日号までこの関連記事が連続掲載された。このスクープ記事の内容は、TIME(2001年9月15日号)に現代のベートーベンとして紹介され、NHKスペシャル「魂の旋律～音を失った作曲家」(2012年3月31日放送)でも大きく取り上げられ、マスコミの脚光を浴びていた、被爆2世で全聾の天才作曲家には、実際の作曲を行った別のゴーストライターがいる。しかも全聾というのは虚偽で、知られている作品「交響曲第一番 HIROSHIMA」「ヴァイオリンのためのソナチネ」等の作品は、すべてそのゴーストライターの作品であるといった大変センセーショナルな記事であった。さらに、この「ヴァイオリンのためのソナチネ」という作品は、2014年に開催されたソチ冬期オリンピックフィギュアスケートのショートプログラムで高橋大輔選手が使用することになっていた曲である。また、その曲はその自称全聾の作曲家が、義手の少女ヴァイオリニストに捧げられた曲ということになっていた。また、この自称天才作曲家には、「交響曲第一番」と題する自伝的小説

が講談社から2007年に出版されている<sup>1)</sup>。

このマスコミを手玉に取り、マスコミを利用して、そのマスコミと社会を長年に亘り騙し続けた、自称全聾の天才作曲家Aについては、当該の週刊文春の記事がその自伝の小説からわかりやすい年譜をまとめている。それを概略すると、

- 1963年 広島に被爆2世として生まれ、1982年高校卒業とともに上京。
- 1990年 シンセサイザーで作曲を始めるが、1993年左耳の聴力を失う。
- 1996年 翌年5月に放映される映画「秋桜」の音楽の依頼を受ける。
- 1999年 ゲーム「鬼武者」の音楽を担当。この年の2月35歳で両耳の聴力を失う。
- 2001年 「交響組曲ライジング・サン」（鬼武者サントラ）発売。同年9月米誌 TIME に「現代のベートーベン」と紹介される。
- 2002年 身体障害者手帳の交付を受ける。
- 2003年 「交響曲第一番」完成。
- 2007年 講談社から自伝「交響曲第一番」発売。
- 2008年 「交響曲第一番 HIROSHIMA」が広島で初演。広島市民賞受賞。
- 2009年 義手の少女ヴァイオリニストと出会う。
- 2011年 CD「交響曲第一番 HIROSHIMA」日本コロムビアより発売。
- 2013年 NHK スペシャル「魂の旋律～音を失った作曲家」放送。  
自伝「交響曲第一番」が幻冬舎文庫で発売。  
CD「鎮魂のソナタ」日本コロムビアより発売。

ざっとこのようになる。また、映画「秋桜」の音楽の依頼を受けたという1996年は、ゴーストライターとして、実際の作曲を一手に手がける現代作曲家Bとの出会いの年である。現代作曲家Bによると、その時は無名の作曲家が著名な作曲家のアシスタントをするような感覚で、月数万円の報酬を得るためにその関係が始まったが、すぐに気づいたのは自称天才作曲家Aは有名な作曲家どころか、楽譜が全く書けないし、ピアノも弾けるというようなレベルではないということだったという。以後ゴーストライターとして作曲家Bは、当該の週刊文春の記事により決別する2014年2月まで、その自称天才作曲家Aの作品とされる作曲を一手に引き受け続けた。

その自称天才作曲家Aの自伝の小説には、4歳の時に母親からピアノを教えられ、小学校入学祝に母親にベートーベンの「悲愴」ソナタのレッスンをせがみ、第一楽章を弾いた。小学校2年でバッハの「インベンション」、小学校3年でショパンの「幻想即興曲」、ベートーベンの「テンペスト」「月光」「熱情」を習得<sup>2)</sup>。10歳の頃には母親から「もう私が教えてあげられることはなくなった」といわれたと記され、幼少時の赤バイエル・黄バイエル・ハノン・チェルニー・ソルフェージュ・ブルグミュラー・インベンション・ソナチネ・ソナタ・コンチェルトといったレッスン体験が綴られている。ただし、その体験部分も、ゴーストライターの役割を果たし続けた作曲

家Bが話した体験を、自分の体験のように自伝的小説に盗み取られたものであるという。また、ゴーストライター作曲家Bによると、自称天才作曲家Aはそもそもピアノが弾けるというようなレベルではないし、正規の音楽教育を受けていないために楽譜は書けない。そのような人が天才作曲家と称して長年マスコミと社会を騙し続けた訳であるので、何ともすごい天才といわざるを得ないだろう。ただしその天才は、音楽ではなく、障害を詐称したり、人を騙したり、派手に自分を誇示して見せかけたり、周りの人やマスコミまで巧みに操る能力についてである。

ゴーストライターの役割を果たし続けた作曲家Bが、告発に踏み切ったのは、自称天才作曲家Aとコンビで世間を騙し続けたと自責の念により度々関係解消を申し出ていたこともあるが、義手の少女ヴァイオリニストに、義手を外してステージに持って行き、それを聴衆の面前で取り付けて演奏をするといった無神経きわまりない理不尽な要求をし、それを拒んだ本人と家族を脅すなどの行為があり、その少女と家族を守るために告発に踏み切ったということである<sup>3)</sup>。

この記事を読んで、ふと思いついたのは、犯罪精神医学や犯罪心理学で使われているサイコパス Psychopath という用語であった。ただし、これはあくまでマスコミで報道された記事の内容から組み立てられる人物イメージについてであり、実際の臨床的な観察所見に基づいているものではないので、実際の対象となっている人物についての推定診断として明言するものではない。ちなみに、この人物を演技性パーソナリティ障害と見立てている精神科医もいる(和田, 2014)。

## サイコパス Psychopath, Psychopathy

サイコパス Psychopath/Psychopathy とは、本来残虐あるいは猟奇的な異常犯罪者のプロファイルに用いられた概念で、ソシオパス Sociopath という用語も用いられる。アメリカ精神医学会の診断基準 Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders (DSM) のパーソナリティ障害群 Personality Disorders のうち、反社会性パーソナリティ障害 Antisocial Personality Disorder の原初概念という。ただし、この Psychopath/Psychopathy という用語は、ドイツ語の Psychopathie 精神病質を起源とするもので、そのままであればその上位概念である Personality Disorders に相当するものである。元々用語としては紛らわしいので Antisocial Psychopath という用語を用いる場合もある。犯罪者の中でも、特に精神病質的な症例についてこのサイコパスという用語を用いている。精神病質というドイツ精神医学で用いられた用語は、アメリカ精神医学会で用いられるパーソナリティ障害もしくはパーソナリティ障害群に相当するので、本稿では音訳のサイコパスを用いる。

Hare (1993/2000, 1999) によると、サイコパスの症状は、感情と対人関係領域では、口達者で皮相的、自己中心的で傲慢、良心の呵責や罪悪感の欠如、共感能力の欠如、ずるく、ごまかしがうまい、浅い感情。社会的異常性の領域では、衝動的、行動をコ

ントロールすることが苦手，興奮がないとやっていけない，責任感の欠如，幼い頃の問題行動，成人してからの反社会的行動，といった特性を挙げている。Hare (1991, 2003) は，Hare Psychopathy Checklist-Revised (PCL-R) ヘア・サイコパスチェックリスト改訂版という測定尺度を開発しているが，Hare & Neumann (2008) は，そのチェックリストのデータに因子分析を施したところ，2因子の中にさらに2因子の入れ子構造をもつ4因子の測定尺度であることを明らかにしている。すなわち，対人関係/情動次元 Interpersonal/Affective (因子) は，さらに情動と対人関係の下位次元 (因子) に分岐し，生活様式/反社会的行動 Lifestyle/Antisocial の次元はさらに生活様式と反社会的行動の下位次元に分岐する。

このサイコパスについて，もっとも厄介なのは，巧みに偽装し立派な人物に見せかけるので，素人目にはほとんどその本当の正体が気づかれないことである。しかも貪欲で自分本位に，そっと忍び寄り，餌を食いあさり，他人を傷つけ，他人のものを何でも奪っていく。他者は皆，餌か道具である。善良で親切な人ほど，格好の餌食にされやすく，親切に関わろうとすると返ってひどい目に遭いやすい。対人的共感性と良心や罪悪感といったものを欠いている。自分の操作により他者が傷つき，苦しんだり悲しんだりするものなら，それは自分の有能さと捉え，なお一層の優越感や支配欲の満足感・自己陶醉感が得られる。また，そうした他者の権利や所有物の侵害も，巧妙に仕掛けられているので相手に相当な被害を与えている場合でも，被害者にさえ気づかれない場合も少なくない。犯人像がつかめない凶悪な連続殺人事件などは，まさにこうしたサイコパスの仕業である。1991年に話題となったアメリカ映画「羊たちの沈黙」は，まさにこのサイコパスによる猟奇的な殺人事件をテーマとしたもので，その中に登場する元精神科医で凶悪犯ハンニバルは実在したサイコパスの凶悪犯 (ただし，実際には元精神科医ではない) をモデルとしたものであるという。

高橋 (1999) は，日本のサイコパスの犯罪例として，第2次世界大戦下の七三一部隊 (石井部隊) の軍医石井四郎，連続殺人鬼小平義雄や永山則夫，多重人格障害 (解離性同一性障害) の精神鑑定もついていた少女連続誘拐殺人事件のM等を取り上げている。あるいは，神戸連続児童殺傷事件の少年Aを，性的サディズムを伴う少年版サイコパスとしている (この事例は，当初の精神鑑定結果が反社会性人格障害という誤報がされたが，実際には素行障害，後に医療少年院で高機能広汎性発達障害という診断が追加された)。

このように記述すると，サイコパスは皆暴力的で凶悪な連続殺人のように誤解されてしまうかもしれないが，そうではない。犯罪者の中でも，狡猾な詐欺の常習犯もあれば，カルト集団の教祖のようなものもあり，必ずしも自分の手を血で染める者ばかりではない。坂本弁護士一家殺人事件，松本サリン事件，地下鉄サリン事件等数々の連続事件を引き起こしたオウム真理教の教祖などはその例である。そのカルト集団による数々の凶悪犯罪の実行犯は，洗脳された弟子や信者だったことは日本の犯罪史においても特異なものである。

中西（1987）は、トリカブト保険金殺人事件の神谷力を、当時の診断基準で自己愛性人格障害（自己愛性パーソナリティ障害）としたが、3人の配偶者を含む疑惑のある4件の死亡事件のうち立件されたのは1件のみで、かなり狡猾な知能犯であった。トリカブト毒とフグ毒のブレンドによる拮抗作用を利用し、保険金目当ての完全犯罪を狙った冷徹な知能犯によるこの事例の場合、自己愛性パーソナリティ障害のみの説明概念より、サイコパスの方が遙かに説得力を持っているのではないか。ただし、当時の診断基準では複数のパーソナリティ障害の併存の場合、主たる1つを診断名に当てたためとも考えられる。後に触れる現在のDSM-5のパーソナリティ障害の診断基準からは、複合的パーソナリティ障害（cf. 宮川, 2011）、自己愛性パーソナリティと反社会性パーソナリティ障害の併存事例と考えることが妥当かもしれない。

さらにサイコパスについて、もっと厄介なのは、Hare（1993/2000, 1999）が未犯罪サイコパス Subcriminal Psychopath（Hare 本の翻訳者は「隠れ有罪サイコパス」と訳しているが、日本語として不自然なので、この訳語を提案する）という用語で記述した、犯罪者としては逮捕されないが、その犯罪すれすれの危険なパーソナリティ特性を隠し持ち、なお善人や良識人を偽装することに優れているので、重症のサイコパスよりなお発見されにくい、サイコパスの存在である。これは、別名ホワイトカラー・サイコパス、成功したサイコパスとも呼ばれ、殺人・暴力といった乱暴な犯罪は引き起こさずに、弁護士・医師・学者・作家・芸術家・実業家・軍人・警察官などの職種で一応社会的に成功している。しかし、サイコパスとしての基本的な特性は存在するので、余程本人の自覚と自制によらない限り、なお周囲に気づかれないように、周囲に対する騙しや搾取といった行為を続けて、それがあつた種の社会的成功に繋がっている場合もある。また、大衆を騙し人心を操作することに長けている場合は、政治家として成功する場合もある。人類に対する最大の罪を犯したヒトラーは、画家から政治家に転じたサイコパスであったのは、決して偶然ではないだろう。また、学問的良心と学問的信念というきれいな事をもって成りたつ大学の研究者の世界も、時にこうしたサイコパスが紛れ込んでいることもある。ただし、他者の論文の剽窃やデータの捏造あるいはハラスメント行為等で問題となるケースは、未犯罪サイコパスとは限らない。本当の未犯罪サイコパスは、もっと狡猾で、研究者倫理に反するような行為を密かに行っているとしても、立派な研究者を装っているため、たやすくは見破れない。仮に露見しても罪を問われない手口で、他者の知的財産等を奪い、労力を搾取し、巧妙に大学や学会に自分を売り込む方法を心得ている。あるいは学内や学会の実力者（権力者）となっていくために、闇の派閥組織を密かに形成し、ライバルを蹴落とし、人間関係をめちゃくちゃにしていくといったキャンパスの病理は、たった一人の未犯罪サイコパスによっても十分引き起こされうる。おめでたい大学の先生集団を羊の群れに例えるなら、羊の群れに忍び込んだ羊の皮を被った狼とえば、この難解な未犯罪サイコパスの一端が理解されるかもしれない。

さて、次の検討は、このようにリアルな描写と理解が可能なサイコパスという概念

を、DSM-5の相当する診断概念がどれだけ取って替えられるかという課題である。サイコパスを前帯状回や扁桃体といった脳の傍辺縁系部位の機能発達不全と捉えた、Kiehl & Buckholtz (2010/2011) は、DSM はサイコパスを反社会性パーソナリティ障害で一緒にしているが、反社会性パーソナリティ障害として診断された1/5程度がサイコパスにあてはまるにすぎないと DSM の診断基準を批判している。

## アメリカ精神医学会 DSM-5におけるパーソナリティ障害群

2013年5月に改訂されたアメリカ精神医学会の診断基準 DSM-5 (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fifth Edition) は、2014年6月に日本精神神経医学会用語監修により日本語版が刊行されている (American Psychiatric Association, 2013/2014)。その日本語版をみると、その前版 DSM-IV-TR (American Psychiatric Association, 2000/2008) と比べると、パーソナリティ障害群 Personality Disorders (DSM-IV-TR の日本語訳ではパーソナリティ障害と訳されていたが、原語に変更があったわけではない) について、原典の診断基準といった本体部分はほとんど変わっていない。10のパーソナリティ障害の下位分類を維持し、それらを A 群パーソナリティ障害 Cluster A Personality Disorders, B 群パーソナリティ障害 Cluster B Personality Disorders, C 群パーソナリティ障害 Cluster C Personality Disorders に分類することも変更されていない。また、各パーソナリティ障害の診断基準も基本的に変更がない。本体部分の大きな変更部分は、10のパーソナリティ障害に続いて、DSM-IV-TR では特定不能のパーソナリティ障害 Personality Disorder Not Otherwise Specified であったものを、他のパーソナリティ障害 Other personality Disorders, 他の特定されるパーソナリティ障害 Other Specified Personality Disorder, 特定不能のパーソナリティ障害 Unspecified Personality Disorder の3つのカテゴリーに細分化した。また、新しく加わった他のパーソナリティ障害には、明確な診断基準が示されている。

DSM-5の日本語版には、原典にない用語翻訳上の変更が加わっている。まず、DSM-IV-TR では、Personality Disorders はパーソナリティ障害と訳されていたが、パーソナリティ障害群と訳されることとなった。Disorder を障害、Disorders を障害群と訳出するところは他の疾患・障害の訳に揃えたものであり、パーソナリティ障害だけのものではない。同じように、原語に変更はないのに、日本語訳では変更が加えられたのは、A 群パーソナリティ障害の2つの用語についてである。まず、DSM-IV-TR では、妄想性パーソナリティ障害 Paranoid Personality Disorder と訳されていたものが、猜疑性パーソナリティ障害／妄想性パーソナリティ障害と2つの訳語が併記されている。もう1つは、Schizoid Personality Disorder についても、スキゾイドパーソナリティ障害と訳されていたものが、シゾイドパーソナリティ障害／スキゾイドパーソナリティ障害と2つの音訳が併記されている。ここまでの訳語併記が本当に必要であるのか、個人的には疑問を持っている。他の8つのパーソナリティ障害には、日本語訳でも変

更はない。さらに大変皮肉なことに、日本語の訳語を巡って意見の対立があり両論併記となったこの2つのパーソナリティ障害は、次に触れるパーソナリティ障害群のうち1つの代替モデル Alternative DSM-5 Model for Personality Disorders では、削除されてしまっている。

DSM-5における変更について、パーソナリティ障害群の扱いは、ただ1つ他の精神疾患・障害と全く異なった扱いがされている。パーソナリティ障害群についてだけ、代替DSM-5モデルという章が起こされ、次世代の診断基準が示されている(訳pp. 755-774参照)。

**基準A:** パーソナリティ機能のレベル Level of Personality Functioning という新しい診断項目が追加されている。自己 Self: 1. 同一性 Identity, 2. 自己志向性 Self-direction, 対人関係 Interpersonal: 1. 共感性 Empathy, 2. 親密さ Intimacy という構成要素からなり、それぞれについてレベル0~4で機能障害の重症度を評価する。

**基準B:** 病的パーソナリティ特性 Pathological Personality Traits。これが、従来の診断基準Aに相当する基準で、5つの特性領域と25の特性側面からなる。5つの特性領域と側面は次のように要約される。

1. 否定的感情 Negative Affectivity (対 情動安定性 vs. Emotional Stability): 情動不安定・不安性・分離不安感・服従性・敵意・固執・抑うつ性・疑い深い・制限された感情(感情の欠如)
2. 離脱 Detachment (対 外向 vs. Extraversion): 引きこもり・親密さ回避・快感消失・抑うつ性・制限された感情・疑い深さ
3. 対立 Antagonism (対 同調性 vs. Agreeableness): 操作性・虚偽性・誇大性・注意喚起・冷淡・敵意
4. 脱抑制 Disinhibition (対 誠実性 vs. Conscientiousness): 無責任・衝動性・注意散漫・無謀・硬直した完璧主義(その欠如)
5. 精神病性 Psychoticism (対 透明性 vs. Lucidity): 異常な信念や体験・風変わりさ・認知および知覚の統制不能

**基準CおよびD:** 広範性および安定性

**基準E, FおよびG:** パーソナリティ病理に対する代替的説明(鑑別診断)という診断基準モデルが示されている。

また、特定のパーソナリティ障害群として、10あったパーソナリティ障害のうち、6つのパーソナリティ障害のみが生き残っている。反社会性パーソナリティ障害・回避性パーソナリティ障害・境界性パーソナリティ障害・自己愛性パーソナリティ障害・強迫性パーソナリティ障害・統合失調型パーソナリティ障害の6である。

B群パーソナリティ障害では、反社会性パーソナリティ障害・境界性パーソナリティ障害・自己愛性パーソナリティ障害の3/4が残され、演技性パーソナリティ障害

が消失している。

A群パーソナリティ障害では、統合失調型パーソナリティ障害のみが残され、猜疑性パーソナリティ障害／妄想性パーソナリティ障害、シゾイドパーソナリティ障害／スキゾイドパーソナリティ障害と2つの日本語訳が併記されていたパーソナリティ障害の2/3が消失している。

C群パーソナリティ障害では、回避性パーソナリティ障害・強迫性パーソナリティ障害の1/2が残され、依存性パーソナリティ障害が消失している。個人的所感としては、妄想性パーソナリティ障害（別訳猜疑性パーソナリティ障害）については、実際の臨床像としては、その有用性と必要性が消失していないのではないかという疑問をぬぐえない。ただし、こうした臨床上の混乱を避けるために、DSM-5ではこのモデルを正規の全面改定として一本化せず、次世代のパーソナリティ障害群の代替モデルとして、提示した理由であろう。

## アメリカ精神医学会 DSM-5における反社会性パーソナリティ障害と素行障害

さて、DSM-5によるパーソナリティ障害群のうち、反社会性パーソナリティ障害の診断概念と基準で、前述のサイコパスを包括的に含み得るかという残された議論に移る。最初に1つの結論を示しておく、反社会性パーソナリティ障害の診断概念では、残虐あるいは猟奇的な連続殺人事件の犯人像（暴力的サイコパス Violent Psychopath）は、それでも形式的な診断が可能であるかもしれない。その場合でも、自己愛性パーソナリティ障害や演技性パーソナリティ障害、境界性パーソナリティ障害といったB群パーソナリティ障害の基準を同時に満たす場合も珍しくない。特に社会的逸脱の目立つケースは、A群パーソナリティ障害の妄想性パーソナリティ障害の基準を満たす複合的パーソナリティ障害のケースもある。未犯罪サイコパスのケースは、むしろ自己愛性パーソナリティ障害あるいは演技性パーソナリティ障害が主で、反社会性パーソナリティ障害が副次的に併記されるべき診断という可能性も高い。

以下、反社会性パーソナリティ障害の診断基準（訳 p. 650）を、概略紹介をする（一部文言を加筆修正）。この診断基準そのものは DSM-IV から変更がない。

### 診断基準 反社会性パーソナリティ障害

A. 他人の権利を無視し侵害する広範な様式で、15歳以降に生じ、以下の3つ以上によって示される。

(1)違法で社会的規範に適合しない行動：逮捕される行為の繰り返し、(2)虚偽性：嘘をつく・騙す、(3)衝動性：衝動的・無計画、(4)いらだたしさと攻撃性：喧嘩・暴力、(5)無謀さ：自分あるいは他者の安全を考えない無謀さ、(6)無責任：仕事が持続しない・経済的な義務をはたさない、(7)良心の呵責欠如：他人を傷つけたり、いやがらせや盗んだ行為に無関心・正当化

- B. 少なくとも18歳以上である。
- C. 15歳以前に発症した素行障害（素行症）の証拠がある。
- D. 反社会的な行為が起きるのは、統合失調症や双極性障害の経過中のみではない。

反社会性パーソナリティ障害と診断するためには、診断基準Aだけでなく、Bの18歳以上であること、Cの15歳以前で素行障害 Conduct Disorder のエビデンスを確認する必要がある。Bの年齢基準が示されているのは、パーソナリティ障害のうち、唯一反社会性パーソナリティ障害のみである。パーソナリティ障害の診断は、子どもには基本的に適用しない。それはパーソナリティが確立されておらず、例えば病理性があったとしてもまだ固定されておらず、可塑性があるからである。反社会性パーソナリティ障害についてのみ、この適用年齢基準が示され、素行障害との鑑別と連続性が鑑別上、重要とされている。

ここで、DSM-5における素行障害について、簡単に触れておく。前版のDSM-IV-TRにおいてこの素行障害は、注意欠如および破壊的行動障害 Attention-Deficit and Disruptive Behavior Disorders のカテゴリーに含まれていた。つまり、注意欠如・多動性障害 Attention-Deficit/Hyperactive Disorder (ADHD) と同じカテゴリーの障害に、素行障害と反抗挑戦性障害 Oppositional Defiant Disorder, 特定不能の破壊的行動障害 Disruptive Behavior Disorder Not Otherwise Specified を包括する破壊的行動障害が含まれていた。それは、注意欠如・多動性障害 → 反抗挑戦性障害 → 素行障害という関連図式が想定されていたからである。DSM-5では、破壊的行動障害は、秩序破壊的・衝動制御・素行症群 Disruptive, Impulse-Control, and Conduct Disorder として、注意欠如・多動性障害から独立し、他のどこにも分類されない衝動制御の障害 Impulse-Control Disorders Not Elsewhere Classified と合併し、別の障害群〈分類カテゴリー〉に分類されている。この新しい障害群には、反抗挑戦症／反抗挑戦性障害、間欠爆発症／間欠性爆発性障害 Intermittent Explosive Disorder, 素行症／素行障害、反社会性パーソナリティ障害、放火症 Pyromania, 窃盗症 Kleptomania, 他の特定される秩序破壊的・衝動制御・素行症 Other Specified Disruptive, Impulse-Control, and Conduct Disorder, 特定不能の秩序破壊的・衝動制御・素行症 Unspecified Disruptive, Impulse-Control, and Conduct Disorder が含まれている。

次に素行症／素行障害の診断基準（訳 pp. 461-462）を概略する。素行症と素行障害と2つの訳語が併記されている。症と障害はともに disorder の訳であるが、症はどちらかという和一時的な症状で治療可能という意味を示す表記である。

#### 診断基準 素行症／素行障害

A. 他者の基本的人権または年齢相応の主要な社会的規範または規則を侵害することが反復し持続する行動様式で、以下の15の基準のうち、どの基準群からでも少なくとも3つが過去12カ月の間に存在し、基準の少なくとも1つは過去6カ月の間に存

在したことによって明らかになる。

### 人および動物に対する攻撃性 Aggression to People and Animals

(1)他人をいじめ、脅迫、威嚇する、(2)取っ組み合いの喧嘩を始める、(3)他人に重大な身体的危害を与えるような凶器を使用したことがある、(4)人に対して身体的に残酷、(5)動物に対して身体的に残酷、(6)被害者の面前で盗みをしたことがある、(7)性行為を強いたことがある

### 所有物の破壊 Destruction of Property

(8)重大な損害を与えるために故意に放火したことがある、(9)故意に他人の所有物を破壊したことがある

### 虚偽性や窃盗 Deceitfulness or Theft

(10)他人の住居、建造物、または車に侵入したことがある、(11)物または好意を得たり、義務を免れるためしばしば嘘をつく、(12)被害者の面前ではなく、多少価値のある物品を盗んだことがある

### 重大な規則違反 Serious Violations of Rules

(13)親の禁止にもかかわらず、夜間に外出する行為が13歳未満から始まる、(14)親または親代わりの家に住んでいる間に、一晚中、家を空けたことが少なくとも2回、または長期にわたって家に帰らないことが1回あった、(15)学校を怠ける行為が13歳未満から始まる

B. その行動の障害は、臨床的に意味のある社会的、学業的、職業的機能の障害を引き起こしている

C. その人が18歳以上の場合、反社会性パーソナリティ障害の基準を満たさない。

#### ▶いずれかを特定せよ

小児期発症型（10歳になるまで素行症に特徴的な基準の少なくとも1つの症状が発症）

青年期発症型（10歳になるまで素行症に特徴的な症状はまったく認められない）

特定不能の発症年齢（素行症の基準は満たしているが、最初の症状の出現時期が10歳より前か後か判断するのに十分な情報がない）

#### ▶向社会的な情動が限られている：過去12カ月以上にわたって持続的に以下の2つ以上をさまざまな対人関係や状況で示したことがなければならない

後悔または罪責感の欠如

冷淡——共感の欠如

自分の振る舞いを気にしない

感情の浅薄または欠如

#### ▶現在の重症度を特定せよ

軽度 中等度 重度

ここで反社会性パーソナリティ障害と素行障害との鑑別で注意しないとイケないの

は、18歳の年齢を目安として、18歳未満の少年の場合は反社会性パーソナリティ障害の診断を適用せず、素行障害を適用する。一方、反社会性パーソナリティ障害と診断する場合、15歳以前に素行障害の症状が見られたというエビデンスが必要である。これらの診断基準は、DSM-IV-TR から変更されていない。

ついでに代替モデルの反社会性パーソナリティ障害の提案された診断基準について、概略紹介をする（訳 pp. 763-764）。

A. パーソナリティ障害で中等度またはそれ以上の障害で、4つの領域のうち2つ以上に特徴的な困難がある。

(1)同一性：自己中心性、(2)自己志向性：法または文化的規範に従わない、(3)共感性：他者の感情・欲求・苦痛に無関心、(4)親密さ：親密な関係を築く能力がない：だます・強制、搾取、支配・威嚇

B. 以下の7つの病的パーソナリティ特性のうち6つ以上

(1)操作性：他者を操る、(2)冷淡：他者の感情・問題に無関心、罪悪感良心の呵責がない、(3)虚偽性：不誠実・不正・偽装・でっちあげ、(4)敵意：持続的ないし頻繁な怒りの感情・易怒性・卑劣・報復的行動、(5)無謀：危険で大胆で自己を傷つける活動に関与、(6)衝動性：無計画で衝動的な行動、(7)無責任：義務・約束を守らない  
注：少なくとも18歳以上である。

代替モデルでは、診断規準B(1)にサイコパスで重視されていた他者を巧妙に操り利用する（操作性）が加わっているのも、よりサイコパスに診断基準を近づけたのではないかと考えられる。また、代替モデルによる反社会性パーソナリティ障害の診断を行った場合、現行モデルより診断のハードルが高くなっているのも、反社会性パーソナリティ障害と診断される比率が減少すると予測できる。代替モデルは新たに診断基準Aの4項目が加わっただけでなく、現行モデルで診断基準Aでは3/7以上の該当であったものが、相当する診断基準Bの6/7以上とあらかたの項目が該当する必要があることになったからである。

#### ■注

1) この自伝的小説は、次の文献であるが、通常の引用文献としては列記せず、週刊文春の当該記事の孫引用の形式を採る。ただし、その出典については、原本で内容確認を行っている。それはこの自称天才作曲家Aについて本文では、基本的な匿名性を維持したいためである。

佐村河内守 (2007) 交響曲第一番 講談社 (2013年に『交響曲第一番一闇の中の小さな光一』として幻冬舎文庫として収録発刊)

2) この部分の記述は、週刊文春2014年2月20日号の関連記事 (pp. 22-27) に、小学校3年生の部分は、その自伝的小説の記述を加筆したものである。実際にピアノを習ったことのある人なら、この記述は、かなり胡散臭い記述であることに気づくかもしれない。特に小学校3年生で、はたしてショパンの「幻想即興曲」、ベートーベンの「テンペスト」「月光」「熱情」を弾きこなせたのだろうかという素朴な疑問は、単に技術的な問題だけではなく、日本の小学校3年生の手の大き

さにもある。

3) 週刊文春2014年2月27日の関連記事 (pp. 24-29) による。

#### ■引用文献

---

- American Psychiatric Association. (2000) *Diagnostic and statistical manual of mental disorders. Fourth ed., Text Revision; DSM-IV-TR*. Washington, D.C: American Psychiatric Association. (高橋三郎・大野裕・染矢俊之訳 2008 DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- American Psychiatric Association. (2013) *Diagnostic and statistical manual of mental disorders. Fifth Edition: DSM-5*. Washington, D.C: American Psychiatric Association. (日本精神神経医学会日本語版用語監修 高橋三郎・大野裕監修 染谷俊之・神庭重信・尾崎紀夫・三村将・村井俊哉訳 2014 DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- Hare, R. D. (1991) *The Hare Psychopathy Checklist-Revised*. Toronto, ON: Multi-Health Systems.
- Hare, R. D. (1993) *Without conscience: the disturbing world of the psychopaths among us*. New York, NY: Pocket Books. Republished in 1999 by Guilford Press, New York, NY. (小林宏明訳 2000 診断名サイコパス—身近にひそむ異常人格者たち— 早川書房)
- Hare, R. D. (2003) *The Hare Psychopathy Checklist-Revised*. 2nd ed. Toronto, ON: Multi-Health Systems.
- Hare, R. D., and Neumann, C.S. (2008) Psychopathy as a clinical and empirical construct. *Annual Review of Clinical Psychology*, **4**, 217-246.
- Kiehl, K. A., and Buckholtz, J. W. (2010) Inside of the mind of a psychopath. *Scientific American Mind*, **September/October 2010**, 22-29. (牛島定信監訳 2013 サイコパスの脳を覗く 日経サイエンス, **2013年2月号**, 32-40.)
- 神山典士 (2013) みっくん, 光のヴァイオリン 佼成出版社
- 神山典士・週刊文春取材班 (2014) 全蠶の作曲家はベテン師だった! ゴーストライター懺悔実名告白 週刊文春, **2014年2月13日号**, 24-31.
- 宮川充司 (2011) わかりにくい青年期以降の発達障害—パーソナリティ障害との廻間で— 相山女子園大学学生相談室活動報告, **6**, 5-8.
- 中西信夫 (1987) ナルシズム—天才と狂気の心理学— 講談社
- 高橋紳吾 (1999) サイコパスという名の怖い人々 河出書房新社
- 和田秀樹 (2014) 世界一騙されやすい日本人—演技性パーソナリティ時代の到来— ブックマン社